



鳥取県知事 平井 伸治

新型コロナ VS 国際交流

新型コロナウイルスが地球に吹き荒れる。

感染症は、地震や洪水とは違い、人間同士が出会うことで広がる。新型コロナは、会食で盛り上がり、歌ったり、パーティーを開いたりという、人間同士が真の触れ合いをする場面でクラスターを惹起する。社会生活を営み、経済を賑わし、人々が心をつなげる「交流」を狙い、飛沫感染は魔の手を伸ばしてくる。ひいては経済・社会の土台を切り崩す。

これまで、ボーダーレスを合言葉に、国際社会は順調に発展を遂げてきた。しかし新型コロナがその脅威を見せつけると、国境は閉ざされ、人の移動が封じられ、経済・スポーツ・文化等すべての分野で、交流は一様に凍結されることとなった。新型コロナは、尊い人の命や健康のみならず、社会のグローバル化の歩みとともに育まれてきた国際交流をも根底から蝕み、世界中で地域外交は「鼓動」を止め、ひっそりと静まり返っている。

鳥取県でも、関係者が国境を越えて協力し運航を続けてきた、日本で唯一ロシア・韓国と日本を結んでいた定期フェリーが運航を停止した。本県境港では空前の活況を呈していた国内外のクルーズ客船は姿を消し、米子鬼太郎空港からの国際航空便は軒並み運休。鳥取砂丘コナン空港も含めてチャーター便すら翼は見えない。毎年北東アジア地域持ち回りで開催してきた地方政府サミットも来年に延期。様々な交流行事は軒並み休眠状態だ。

更には、新型コロナを前にして、超大国の政権が互いに離反し合う「遠心力」が冷戦時代を彷彿とさせるように急激に強まってきた。第二次世界大戦後、もう二度と戦争を起こすまいと、米国アイゼンハワー大統領が市民外交を目指し「ピープル・トゥー・ピープル・プログラム」により姉妹都市交流を提唱した精神は、すっかり吹き飛んでしまったのではないか。

しかし国境はあれども、同じ人間同士だ。真の友情と信頼があれば、感染症の脅威を乗り越え、果てしない距離をも越えていける。

本県は、長年の友好地域とは、お互いに感染症対策物資を送り合うなど協力を重ね、初めてテレビ会議を実施。笑顔で手を振り、新型コロナ克服を誓い合った。東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会でキャンプ地のホストを務める予定だった、ジャマイカのオリ・パラ関係者や、フランススポーツクライミングチーム、クロアチア拠点の国際セーリングチームからは、必ず当地を訪れるという熱いメッセージが届いている。

いずれ時計は再び動き出す。ICTなどを活用した新たな国際交流の形も、新型コロナ禍の知恵から生まれてこよう。

「咳をしても一人」

本県出身の尾崎放哉の句だが、そんな孤独は作るまい。人々は必ずや絆を取り戻す。